

東アジアにおける死の叙情性

著者	具 廷鎬, 村田 右富実
引用	百舌鳥国文. 24, p.1-12
URL	http://doi.org/10.24729/00005045

東アジアにおける死の叙情性⁽¹⁾

具 田 廷 鏞
村 田 右 富 実

一、序

本稿は「東アジアにおける死の叙情性に関する研究」の一環として古代日本と韓国の詩歌における死の叙情性を考察しようとするものである。日本の場合は『古事記』の「大御葬歌」や『万葉集』所収の挽歌群から『古今集』以降の哀傷歌に至るまで、豊富な和歌資料を基盤とした着実な研究の進捗を見せている。しかし、韓国側においては日本のような研究基盤が形成されているとはいえない。古代文献資料の不足が一因ではあるものの、死者を偲ぶ表現情緒や文学研究の視点が日本のそれとは異なることにも大きな要因があると思われる。

韓国には日本の「挽歌」のように人間の死を哀悼する詩歌を一つの種類として立てることはないが、「挽歌」というジャンルがある。「挽歌」は早く『晋書』に見えるが、同一箇所を「挽歌」

とするテキストも存在する。⁽²⁾ また、『一切経音義』の、「挽⁽³⁾」「挽住⁽⁴⁾」の記述からも「挽」と「挽」とに弁別的差異が存在したとは考えられない。

しかし、内容面から見た時、両者は異質なものであるといわざるをえない。韓国の「挽歌」はいま現在も伝統的な葬儀の中に生きており、殯所から葬地へ柩を運ぶ人たちによって実際に歌われている。また韓国の「挽歌」は昔から各地方に口伝として伝わっているが、内容や詠歌ぶりにおいて基本的には大同小異であり、その形式は柩を載せた輿の前に立って行列を指揮する人が「挽歌」の一節を先唱すると、輿を担いでいく者同士がその合間に「エエ、エヘヘヤ、エヘ、エヘ、オホホヤ」と繰り返して後唱するものである。一例として珍島^{ジンド}地域に伝わっている「挽歌」を、先唱者の歌詞のみ訳して記す。

どこへ行くか、どこへ行くか、深山險路をどうやって行くか、古老の話を聞くと、黄泉への路は遠いというが、今日その道に立ってみると、家の前の山が北郎なのね、三千甲子東方朔は 三千甲子を生きたが、今日行かれた亡者は、百年も生きていられたね、遊んで行く、休んで行く、行ってしまつたら戻つてこられない道、どうやって行けるか、行けない行かない、どうしても悲しくて行けない、愛する人を置いては行けない、行く行くわたしは行く、行ってしまつたら戻つてこられない道、友よ、さようなら、わが子等もさようなら、私はいく、この道を。⁽⁵⁾

内容の上で「今日行かれた亡者は百年も生きていられたか」という個所は解釈によって死者以外の第三者を主体と考えることも可能であるが、全体としては、死者の立場で歌つているといえよう。この「挽歌」が伝わってくる珍島は韓国の中でもさまざまな無形の文化財が残っていることから、民俗学価値が重視される地方である。就中、上掲の歌は一九八七年八月に全羅南道の無形文化財第十九号として登録されたものである。この例からうかがえるように、韓国の「挽歌」は運柩の際に詠まれる葬送儀礼的な要素が強い。韓国の「挽歌」は実際儀礼に

おいて歌われる点に重きがあるのに対し、日本の「挽歌」はその叙情性に中心があるといつてよいだろう。また、韓国の「挽歌」は「労働謡」に分類されるに對して日本の挽歌は『万葉集』巻二の一四五番歌「山上臣憶良追和歌一首」の左注に「右の件の歌どもは、柩を挽く時に作るところにあらずといへども、歌の意をなすらふ。この故に挽歌の類に載す」とあるように、「柩を引く時の歌」以外であっても挽歌の類に分類しており、韓国の「挽歌」と日本の「挽歌」との差異は大きい。

したがって、両国の古代詩歌において「死の叙情性」という共通性を導出するために、韓国の「挽歌」と日本の「挽歌」を同一線上にあげて比較考察することそれ相応の困難がつきまとう。しかし、「挽歌」、「挽歌」という固定化されたカテゴリーに縛られることなく、万葉集の一四五番歌の左注がいうように、「柩を引く時の歌」でなくてもそれに準ずるものまで視野の幅を広げて両国の古代歌謡における叙情性をさぐってみることは、方法的有効性は確保されるであろう。

このような観点から見たとき、「公無渡河歌」は注目に値する。後に詳述するが、この歌は死の叙情性という側面において孝徳紀・斉明紀の歌謡や武烈紀の影媛をめぐる歌謡と、ある共通性を持つと同時に異質性を持つからである。結論を先取りして述

べるならば、孝徳紀・斉明紀の挽歌が中国の挽歌詩の影響を受けつつ、万葉挽歌を経由して後世の哀傷歌へと流れていくように、「公無渡河歌」を韓国の叙情挽歌の始発と捉えたいのである。

もちろん、両者の間には共通性と異質性が存在するのは確かである。しかし、この共異性の問題はある程度相対化できると考える。つまり、中国の挽歌詩という同じ根源から出発した故に生じた共通性が変容し、異質性として現出したと把握したいのである。

こうした観点に基づいて本稿は「公無渡河歌」を初めとする「死の歌」と日本の初期挽歌を考察対象とし、それに漢籍の用例も視野に入れて特に韓国の挽歌と日本の挽歌を挽歌史の流れの上で追究してみたい。

一、「公無渡河歌」の典拠

「公無渡河歌」は韓国の数少ない古代歌謡のひとつである。この歌は、早く後漢の蔡邕撰の『琴操』と晋の崔豹著の『古今注』に見えるが、前者は逸文に確認できるだけである。また、管見によるかぎり現存する『古今注』には歌にかかわる説話的記述のみで歌は収録していない。歌を含んだ説話を確認できる文献

として早いものは『楽府詩集』であろう。『楽府詩集』巻二十六の「相和六引」の「箜篌引」には崔豹の『古今注』を引用する形で歌を紹介している。それは次のように纏められよう。

公無渡河は崔豹の古今注に曰く、箜篌引は朝鮮の津卒、霍里子高の妻、麗玉の作である。子高が船にいる時、一人の白髪狂夫が散髪をして酒瓶を下げて乱流を渡ろうとした。その妻がついてきて制止しようとしたが、及ばず、遂に河に墮ちて死んだ。妻は箜篌を引きながら、

君河を渡ることなかれ 君敢へて渡りき 河に墮ちて死にたり ああ、まさに君を如何にせむ

と歌った。その声は甚だ悽切であった。曲が終わると亦、自ら河に身を投げて死んだ。子高は麗玉に語った。麗玉は悼み、箜篌を引いてその歌を倣って歌った。聞く者は誰もが涙ぐまない者はない。麗玉はその歌を隣(6)の麗容に伝えた。

元来「箜篌引」は古楽府の題名で、始めは後漢の「公無渡河云々」という歌詞に名付けられたもの(7)とされることから「箜篌引」を「公無渡河歌」と呼んで差支えないだろう。(以下、「公無渡河歌」とする)

「公無渡河歌」が古代朝鮮の作品として注目を浴びたのは十六世紀頃である。当時の学者である権文海（一五三四〜九一）が元の陰時夫著『韻府群玉』の体裁を模倣した百科事典『大同韻府群玉』で『古今注』を引用したことがその契機となる。この霍里子高の物語は当時の朝鮮の知識人の間に広く受容されていたらしい。一例をあげると、朝鮮の仁祖朝の文人である張維（一五八七〜一六三八）が一六四三（仁祖二二）年刊行した詩文集の『谿谷集』所収五言古詩に「黄兄悦之の死を悼む」という漢詩がある。平素、呼兄呼弟と付き合っていた知人の溺死に心を悼んで詠み祀られた作である。紙幅の都合上、関連箇所のみを読み下すと、次のようである。

（前略）河川は増水して天に届くほどであり、飛ぶ大蛇も引っくり返すほどの暴風の中を、髪を振り乱した老人でもないので、どうして兄はそれを渡ろうとしたのか（中略）
 慈父は天に向かつて痛哭して河のほうへ狂走し、か弱い妻は幼ない子供を抱えて断腸の思いで箜篌詞を詠んだ（後略）
 （傍線筆者）⁸

傍線部の表現からみて、この漢詩は「公無渡河歌」の本説取

りとさえいえよう。死者を傷む詩歌に「公無渡河歌」をめぐる物語を本説として取っているということは「公無渡河歌」から挽歌的要素を受容していたといつてよい。またほぼ同じ時期を生きた朝鮮中期の代表的な学者の一人とされる李睟光（一五六三〜一六二八）は著書『芝峯類設（二六二三）』巻十の「古楽府」の箇所で、

箜篌引。亦、公無渡河という。楽府序に云く朝鮮津卒、霍里子高の妻、麗玉が作った。此の詞は古楽府に載せてあつて我が国に伝わらないのは、惜む可きことである。

と説き、古代朝鮮の歌でありながら、所収典籍を中国に依るしかないことを惜しんでいる。朝鮮の資料として当該歌を物語とともに確認できるようにするのは朴趾源の『熱河日記』を待たなければならぬ。『熱河日記』は朝鮮後期の実学者であつた著者の四十四歳の時（一七八〇年）、清国の乾隆帝の七旬祝いの使節の一員として北京を訪問した後に著した一種の見聞録である。その中の「銅蘭涉筆」という箇所に、『太平御覽』を引用する形で、公無渡河歌を紹介している。

太平御覽云。漢時霍里子高。朝鮮人也。晨起刺船。見一白首狂夫。被髮携壺。亂流而渡。其妻止之不及。遂溺死。妻乃携壺篋鼓之。歌曰。公無渡河。公終渡河。公淹而死。當奈公何。音甚悽切。曲終亦投河而死。子高還。以其聲語妻麗玉傷之。引壺篋寫其聲。爲壺篋引。

前掲の『楽府詩集』と比べてみての相違する点は、『楽府詩集』は、「朝鮮津卒、霍里子高」としているのに対して、『熱河日記』には霍里子高が朝鮮人であることを明らかにしていることとぐらひであろう。また、歌の第三句が『楽府詩集』には「墮河而死」とあり、『熱河日記』には「公淹而死」とあるが、詩句の意味内容にはそれほど変りはない。

従来、「公無渡河歌」に関する韓国内の研究は数少ない古代歌謡であるという、文学史的意義から多数の研究者が論じてきた。そしてその研究の傾向は歌自体より背景説話に関わる問題に重点が置かれていた感がある。たとえば白髮狂夫説話の典拠が漢籍ということから、この歌を果して古代韓国の歌謡とすることは可能なのか、それとも中国のものとするべきかという作品の国籍にかかわる問題が議論されて来たが、これに関して成基王が述べるように、漢四郡時代、今の北朝鮮の大同江流域で発生

した当該歌が中国に伝えられて楽府に編入されたとしてよいであろう。その他さまざまな論究の中で最も頻繁に論争されたことは説話の性格を究明することであつた。説話中に登場する散髪の白髮狂夫を酒神と見、夫の死を目にして歌を歌つた妻を川の妖精（楽神）と見る説や白髮狂夫を恍惚の境地に陥つた巫子と見る説もある。一方これらのような、神話や祭儀的な側面からの接近でなく、「公無渡河歌」とそれにかかわる説話を歌謡発生期の特性として見るべしとする主張も提起された。

また本稿のように「死の叙情性」という、いわゆる挽歌的な観点から追究しようとした論もある。李完衡は、挽歌の属性を「亡者と生者がともに帯びている死に対する不安・恐怖や恨みを解消させると同時に亡者が感じられるあの世に対する葛藤を解消させるための役割を担うもの」とし、「公無渡河歌」はそのような属性を持つものと見た最初の論である。李妍淑は、「公無渡河歌」はその内容からみて呪術性や儀礼的性質を持つとはいえないものであり、極めて叙情的で私的な歌、一回的な叙情挽歌であると性格づけた。李氏のいう「一回的な叙情挽歌」という言辭はもう少し説明を要する部分ではあるが、基本的に「公無渡河歌」を叙情挽歌と見なす点については首肯できよう。

それでは「公無渡河歌」から求められる叙情挽歌的な性格は

どのようなものであるか。章を変えて具体的な論を進めていきたい。

三、「公無渡河歌」の挽歌性

『古今注』所収の公無渡河歌に関する事項をあたってみると、ひとつ興味深いことに気づく。それは日本の挽歌に影響したと「薤露蒿里歌」の項目に近接して収録されている点である。『古今注』をもとにした後唐の『中華古今注』には「箜篌引」という項目に続いて二行にわたって「悲歌」という項目内容を載せてから「薤露蒿里歌」の項目を設けている。『古今注』や『樂府詩集』がある程度類聚的性格を持っているということと勘案するならば、「箜篌引」と「薤露蒿里歌」の類似性をここから読み取ることも可能だろう。「公無渡河歌」は溺死した夫の死を悼む妻が哀悼の歌を歌った後、夫につづいて溺れる。その光景を目にした子高の目撃談を聞いた子高の妻が歌ったものである。「公無渡河歌」をめぐる説話と武烈紀所収の鮪と影媛をめぐる歌謡物語や孝徳紀の野中川原史満の歌謡との間には通じるところがあると考えずにはいられないだろう。

皇太子の画策によって乃楽山で殺された鮪臣を葬って帰途に臨み、涙をそそいで「青丹よし乃楽のはさまにししじもの水漬

く辺隠り水灌ぐ鮪の若子を漁り出な猪の子」と歌った影媛の歌は夫の溺死を悼み悲しんでその妻が歌った「公無渡河歌」とその状況に類似性を指摘できる。不帰の客になった夫の鮪臣を偲び、「乃楽山の谷間で鹿や猪のようにこもった鮪を漁りださなideおくれ猪よ」と叫ぶ心底には先になくなった夫に対する残された人の痛恨がある。その情は「公無渡河歌」においても同様であるといえよう。「河を渡らないで」と叫ぶ懇切な妻の制止も空しく、結局河を渡ろうとして溺れてしまった夫。後ろからついてきて河に落ちて死んでゆく夫の姿を目の前にした妻が、「ああ、まさに君を如何にせん」と絶叫する「公無渡河歌」の最終句は「鮪を漁りださないでおくれ猪よ」という表現と相通じるものがある。つまり、両者ともに戻れない道に足を踏み出した夫の安否を心配する「残された人の痛恨」が伝わり、村田の言辞を借りれば、「逢えない男(男の生死は別として)を追い求める女性の姿¹⁾」をうかがわせるものがある。

また「公無渡河歌」には孝徳紀の挽歌とも共通する要素がある。今仮に孝徳紀の歌と「公無渡河歌」の物語的設定を記述の順序にそってまとめてみると、次のようになる。

孝徳紀歌謡	公無渡河歌
1、皇太子が造媛の死を聞いて傷み悲しむ。 2、これに野中川原史満が歌を作つて奉る。 3、それを聞いた皇太子は歎き替める 4、琴を授けて歌わせる	1、菴里子高が二人の死を目撃する 1) 白髮狂夫の入水 2) それを見て妻が悲しみ、歌を詠んで入水 2、子高が目撃したことを妻の麗玉に伝える。 3、麗玉が笠篋を抱えて夫から聞き伝えた歌を歌う 4、麗玉は隣の麗容にその歌を伝える

この表を見ると、ここにも一定の共通性が看取できよう。まず状況として両方の歌は死人と直接関係のない、第三者による作である。内田氏は孝徳紀の挽歌が庾信詩の影響下にあつたことを述べて「不帰の人となつた若い女とそこに残された夫君という状況下でその夫君に代つて傷む」ことを指摘している。状況的な面に注意して内田氏の言辭を援用して「公無渡河歌」に代入してみると、「不帰の人となつた白髮狂夫、そこに残された妻、(その妻も間もなく不帰の客になる。)残された狂夫の妻の立場で第三者の麗玉が歌う」ということになるだろう。孝徳紀の挽歌と比べて「公無渡河歌」のほうがより複雑な状況設定にはなつているものの、孝徳紀の歌謡二首が庾信の代人傷往二首と樂府挽歌二首が孝徳紀の挽歌と緊密に対応しているという、いわゆる挽歌の「代作」という図式に公無渡河歌も見事にあてはめら

東アジアにおける死の叙情性

れよう。

以上、公無渡河歌にも万葉挽歌の始原と目される紀の歌謡と通うところがあることを述べてきた。「公無渡河歌」も武烈紀や孝徳紀に見える叙情的挽歌の屬性をもつていってよいだろう。「公無渡河歌」は韓国の叙情挽歌の最初のもつと位置づけることができよう。

四、韓国における死の叙情性のながれ

ここでしばらく挽歌に関連する漢籍の言辭を検討してみよう。『古今注』の「薤露」と「蒿里」は喪歌であつて田横の門人より出たものであり、田横の自殺を悼む門人たちが詠んだ悲歌である。また、武帝の時、李延年がそれを一曲にわけて、「薤露」は王公貴人に送り、「蒿里」は士大夫庶人に送つて柩を挽くものにしてそれを歌わせ、世の中はそれを挽歌と呼んだものとする。そのほか『晋書』には「漢魏の故事に大喪及び大臣の喪に柩を執ることを挽歌といひ、漢武帝の時、役人の労働とする」とある。さらに『左伝』哀公十一年条の、「將戰、公孫夏命其徒歌虞殯」の注の「虞殯は即ち葬送の挽歌、唱を以て必ず死ぬことを示す」という例を見ても、挽歌はもともと労働をともなつて歌われた歌であり、『文選』に収録された挽歌詩の内容からも葬儀の儀礼

が連想される。孝徳紀の初期挽歌からは葬儀の儀式を思わせる個所は見つからないものの、歌の内容においても『文選』に見える挽歌詩が「死者主体」の歌に対して日本の挽歌は「薤路」や「蒿里」の歌の影響を受けた「代作」をへて万葉集における挽歌に至り、後世の哀傷歌につながる。つまり、日本の挽歌は漢籍に見られるような行動を伴う方向でなく、歌自体の叙情的変容の道程を歩んできたといえよう。

それに対して韓国側の歌はどうであろう。前章の末尾で述べたように、「公無渡河歌」を韓国の叙情挽歌の最初のものとして認めたくて韓国の「挽歌」もしくは挽歌は「東アジアの死の叙情性」の流れという面からどのように位置づけることができようか。結論を先にいえば、韓国の「死の歌」には葬送儀礼をともなう中国の挽歌詩の面影を忍ばせる一つの流れと日本の挽歌のように「代作」から「非代作」へという、もう一つの流れが併存するといえよう。以下、それらに関して述べていくことにする。

まず、前者の、葬送儀礼をともなう「挽歌」から検討していくことにしよう。ここで序の部分にあげた珍島挽歌をもう一度想起してほしい。韓国では今はほとんど現代的な儀礼に従って葬儀を行っているが、地方へ行くと稀に伝統的な祭儀をおこな

うことがある。その時は全国どこでも珍島挽歌に類似した内容の歌を歌って柩を運ぶ。勿論、葬儀の儀礼も大同小異である。

珍島挽歌の内容を見てみよう。「どこへ行くか、どこへ行くか」と始まるこの歌は現在でも運柩時に実際歌われる。柩を乗せた輿の先頭に立って葬儀の行列を指揮している人が先唱すると、柩の載せた輿に繋がっている紐を執っている人たちが後唱するのである。歌の内容からみると、確かに死者自身が歌うような形式である。生前住み慣れた家を去って遠くもないすぐそこにある山に葬られる空しさや百年にも満たない短い寿命のもどかしさ、もう二度と帰ってこられない旅に向かう切なさも淡々と歌われる。その内容はまさに「死者主体」とされる中国の挽歌詩のような傾向を受け継がれていると言わなければならぬ。

一方、「公無渡河歌」系はどうだろうか。「公無渡河歌」に次ぐものとして「祭亡妹歌」という作品をあげることができよう。「祭亡妹歌」は新羅の郷歌である。歌の内容はその名が示すように亡者の兄である月明師が亡き妹を祭った際に歌った歌である。万葉仮名に当たる新羅の「吏説」で書かれたもので、高麗の僧一然が著した『三国遺事』に収められている。「祭亡妹歌」の作者月明師は新羅の景德王時の僧侶文人である。『三国遺事』の記

述によると、七六〇（景德王一九）年四月一日、天に太陽がふたつ現れて十日間もなくならない異変が起きた。その時、「兇卒歌」という歌を詠むことによつて異変を解決した人物として登場する。その後妹が亡くなることがあり、妹の魂を慰めるために「祭亡妹歌」を作つて祀つたが、急に狂風が起こり、紙錢（葬送の際鬼神をまつるために作る紙の錢。ことがおわると焼いて捨てる）が飛んで西のほうに向かつてなくなつてしまつたという記述とともに歌が載せてある。当該箇所日本語訳は次のようである。

月明は又嘗て亡くなつた妹のために齋を営み、郷歌を作つてそれを祭る。忽ちつむじ風が吹いてきて紙錢を西のほうへ飛ばして無くなるようにした。歌曰く、

生死の路はとどめえず 往くとも言はで逝くならめ
秋告ぐ風に ここかしこ枝より落つる木の葉はも い
づち行くやは知りがたし さあれ、行きつく果ては弥
陀浄土 また逢ふ日もあらめ 道を修めて期待たん⁽²⁾

『三国遺事』の記述を鵜呑みすれば、右の歌は七六〇年以後に作られた歌なので、ちょうど『万葉集』編纂時期同時代の作と

東アジアにおける死の叙情性

なる。作者月明師は僧侶文人だけあつて、歌全般にわたつて仏教の色彩がつよい。誰しもとどめることの出来ない生死の道で、同じ枝から出てきた木の葉でもいつ散るか分からないうちに散つてしまつたという表現は亡き妹に対する哀悼の情を比喩的に表現している。後半で西方の極楽でまた逢えることを願つて精進するという、残された人としての覚悟がこもつている。ここで注目すべきことは歌が葬送儀礼の一部をなしているということであろう。引用文は亡くなつた妹のために仏教慣習による齋を営み、郷歌を作つてそれを祭つたという。これは挽歌の持つ「柩を引くものが歌う歌」という本来の定義領域をすこし拡大解釈することが許されるのであれば、この「祭亡妹歌」も挽歌の本来の領域から変容した仏教的儀礼ともなつた挽歌とみなすことも可能ではなからうか。「公無渡河歌」から「祭亡妹歌」への繋がりは、孝徳紀・斉明紀の挽歌が万葉挽歌へつながる挽歌史的繋がりと等質であるといつてよからう。古朝鮮の白髮狂夫の死をめぐる「公無渡河歌」からは「死者を悼む者の発想を起点として哀傷歌的な叙情挽歌を志向しつつも、その個別の歌の成立には第三者が介在している」という万葉挽歌の側面を読み取ることができるだろう。また、「祭亡妹歌」からは葬儀に伴う行為とともに、「残された者が死者を悼む」という哀傷歌的要

素を含んでいるといえよう。つまり、日本の和歌史に即しているならば、祭亡妹歌は万葉の挽歌が後世の哀傷歌へと定着する過程の一面を推量させるものとして位置づけていいと考えられる。

万葉挽歌以後、文学史において挽歌の後をついで「哀傷歌」が位置づけられるように、韓国側では「祭亡妹歌」を次ぐものとして、「悼二将歌」を上げることができよう。「悼二将歌」は高麗王朝第一六代の王である睿宗一五（一一二〇）年、王の睿宗が西京（今の平壤）で開いた八閔会に御幸した時、開国功臣である「申崇謙」と「金榮」という二人の人物を追悼する劇を見て心を打たれ、自ら追悼の情を述べた歌である。八閔会は高麗時代に行われた国家的重要行事で、蓮灯会とともに高麗二大国家儀式のひとつであつて十月十五日は西京で、十一月十五日には首都の開京（今の開城）で行われた祭天儀式であつた。二人の將軍は九二七年、今の大邱付近で高麗開国の祖である王建が甄萱が率いる後百濟の軍に包圍たとき、自分たちの命を捨てて王建を救つた人物たちである。歌を現代語訳を次にあげる。

危い時に 君を安全に守つた 忠誠の志は天上までとど
き、魂は去られたが 君が賜つた位の重要さも 劇を見て

わかつた その時の二人の功臣よ 遠い昔のことだが、その忠誠心は 今も現れる（筆者訳）²⁾

この歌は高麗時代に詠まれた歌であるが、新羅の郷歌の後を継ぐ最後の作品として評価される。歌全般にわたつて約二百年前に自分たちの命を捨ててまで高麗の太祖になる王建の命を救つた二人の將軍の忠義を悼んでいる。ここまで来ると、歌はもはや儀礼的な行為から離れてただ残された人が幽明境を異にした人に対して哀惜の情を述べる哀傷歌と類似するものがある。紙幅の都合上これ以上言及は省くことにするが、見てきたように、この「悼二将歌」の流れは二章で述べた「黄兄悅之の死を悼む」のような朝鮮の漢詩に繋がっていくといえよう。

五、結び

「東アジアにおける死の叙情性」を考える時、「挽歌」や「輓歌」といった従来の分類意識に束縛されることはそれほど望ましくなからう。既存の分類のカテゴリを克服してより広い視野から「死の詩」の問題に接近して、そこから共通性ないし異質性を考えるほうがより効果的であるといえよう。

そういう観点に立脚して本稿では韓国の「死の歌」を日本の

挽歌との比較検討を通して「東アジア」というカテゴリの中で、どのように位置づけられようかを考察してみた。その結果、韓国における死の歌は「二通りに分ける」ことができた。一つは今も韓国の伝統葬儀礼の中に生きていて、「挽歌」という分類に属されるものであり、前に引用した『晋書』の、「漢魏の故事に大喪及び大臣の喪に紼を執ることを挽歌といい、漢武帝の時、役人の労働とする」という言辭のような葬礼儀式とともに魏晋の挽歌詩が志向した「死者主体」の趣を持つ流れを汲んでいる類である。

一方、韓国の叙情挽歌系というべき「公無渡河歌」や「祭亡妹歌」、「悼二将歌」のようなものは孝徳紀・斉明紀の初期挽歌から万葉挽歌を経由し、王朝時代の哀傷歌へ至る日本の挽歌史の図式に当てはめられる可能性について述べた。残念なのは韓国側の資料がわずかの教にしか存在しないために、ある程度は推量の域を出ないということである。しかし、日本側の挽歌資料の豊富さが本稿の推論を可能にするのではなからうか。ある一つのはっきりした判断基準があつて、それを判断基準の軸にして周辺事項を推考するという方法論が日韓中という東アジアの死の叙情性を考えるには効果的なものと考えられる。本稿で論じられなかった細部については後稿に期したい。

東アジアにおける死の叙情性

〔注〕

- (1) This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government 8 NRF-2012-013-2012S1A2A1A010291909
- (2) 漢魏故事、大喪及大臣之喪、執紼者挽歌。新禮以爲挽歌出於漢武帝役人之勞歌、聲哀切、遂以爲送終之禮(卷二十・志第十・礼中：1974.11・北京：中華書局・p.626)。『二十四史全訳・晋書』(2004.1・上海：漢語大詞典出版社・p.472)では「挽」の箇所を「挽」と表記する。
- (3) 『正續一切經音義』・附索引兩種・(唐)慧琳、(遼)希麟撰。上海：上海古籍出版社・1986.10・卷五九・十一・ウ
- (4) 注3の本、卷二〇・七・オ
- (5) 『珍島挽歌』：ナ・キョンス・国立南島国案院・2007
- (6) 『公無渡河』。崔豹古今注曰。筮僕引者。朝鮮津卒霍里子高妻麗玉所作也。子高船。有一白首狂夫。披髮提蓋。亂流而渡。其妻隨而止之。不及。遂墮河而死。於是援筮僕歌曰。公無渡河。公竟渡河。墮河而死。當奈公何。聲甚悽慘。作槍。曲終。亦投河而死。子高語麗玉。麗玉傷之。乃引筮僕高其聲。聞者莫不墮淚飲泣。麗玉傳鄰女麗容。『樂府詩集』・郭茂俯編・台北台灣商務印書館・1988.9
- (7) 樂府上、樂府四首、筮僕引の題意・新釈漢文大系『文選』下。明治書院・1986.p.481
- (8) (前略) 漲水怒颯天 黑風翻蚊蚋 不是被髮叟 兄何苦渡之 (中略) 慈父哭呼天 狂走長江湄 弱妻領群雛 腸斷筮僕詞 (後略) 『谿谷先生集』第二五卷「五言古詩(哭黃兄悅之)」筮僕引。亦曰公無渡河。樂府序云朝鮮津卒霍里子高妻麗玉所作。
- (9)

此詞載於古樂府。而我國無傳者。可惜。『芝蔴類說』(上)、世界思想教養全集統十、乙西文化社・1975.2.

(10) 『熱河日記』大東印刷所・昭和七年五月

(11) 成基玉「공무도하가와 한국 서정시 전통(公無渡河歌と韓國の叙情詩の伝統)」・고전시가 연구 일기상・2003・8・太学社・pp.19-4

(12) 鄭炳煜、「주신의 최후(酒神の最後)」『自由文学』42・1960

(13) 趙東一・『韓國文学通史』1・知識産業社・2005・pp.104~106.

(14) 成基玉・前掲論文

(15) 「公無渡河歌」と「祭亡妹歌」の挽歌的性格について(語文研究24、語文研究会・1993.10.p.5)

(16) 注『韓日古代文学研究』「韓日古代挽歌の性格」p.49・2002.9・박의정

(17) 「獻呈挽歌」、『柿本人麻呂と和歌史』2004.1.p.90.

(18) 「孝徳記挽歌二首」『万葉の知——成立と以前』塙邊書94・1992.7p.334

(19) 「薤露菑里並喪歌也。出田横門人横自殺、門人傷之爲之悲歌。言人命如薤上之露、易晞滅也。亦謂人死魂魄歸乎菑里。(略)至孝武時、李延年乃分爲二曲、薤露送王公貴人、菑里送士大夫庶人、使挽柩者歌之、世呼爲挽歌」申鑿・意林・古今注・羸北

臺灣中華書局・1981.9

(20) 前掲の注(一)と同じ。

(21) 「虞殯即送葬之挽歌、唱之以示必死」『春秋左伝注』・北京・中華書局、1981.3.p.1662

(22) 三国遺事の原文…明又嘗爲亡妹營齋。作鄉歌祭之。忽有驚颺吹紙錢、飛舉向西而沒。歌曰生死路隱 此矣有阿米次盼伊遣 吾隱去內如辭叱都 毛如云遣去內尼叱古 於内秋察早隱風未 此矣彼矣浮良落尸葉如 一等隱枝良出古 去奴隱處毛冬乎丁 阿也彌陀利良逢乎 吾道修良待是古如。原文および歌の日本語訳は『完訳三国遺事』(一)然著・金思燁訳、1976/4、朝日新聞社、p.399)にて。

(23) 『柿本人麻呂と和歌史』第二章第一節「挽歌の始発」、村田右富実、和泉書院、2004.4.p.31

(24) 歌本文…主乙完乎白乎 心聞際天乙及昆 魂是去賜矣中 三鳥賜教識麻又欲 望彌阿里刺 及彼可二功臣良 久乃直隱 跡鳥隱現乎賜丁。『平山申氏系譜』状節公行状

くちようほ・韓國中央大教授
むらた みぎふみ・本学教授